

# 削片系両面調整石器

## —男女倉・東内野型有樋尖頭器の再構築—

須藤隆司<sup>1\*</sup>

### 要 旨

本論の目的は、男女倉型有樋尖頭器、東内野型有樋尖頭器、尖頭形彫刻刀形石器、男女倉技法と呼ばれた石器と技術を、削片系両面調整石器・削片系両面調整技術として再構築することである。

削片系両面調整石器には、両面調整石器、面取石器、面取彫器、面取尖頭器、両面調整彫器、彫器、有肩形両面調整石器、有肩形面取石器、背縁有肩形面取尖頭器、有肩形面取尖頭器という多様な形態が存在する。

削片系両面調整技術とは、面取剥離と樋状剥離からなる削片剥離技術を特質とする両面調整技術である。削片剥離技術を駆使して、両面調整石器の再生利用と削片利用という長期的な資源管理とそれに基づく長距離広域遊動を可能とした。

最終氷期最寒冷期直後に、動植物の生息領域が改変される気候変動が起こり、古北海道半島と古本州島の狩猟民たちは従来の遊動領域を大幅に改変した。新たな資源地で遭遇した狩猟民たちは技術情報を共有し、再編された遊動領域の資源環境に適応した様々な石器形態を開発した。

古北海道半島では、細石刃を特徴とする削片系両面調整技術が開発された。古本州島東北地域では、古北海道半島の削片系両面調整技術を組み替えて、大平山元・男女倉型両面調整石器と杉久保型尖頭器を開発した。南関東地域では、東北地域の削片系両面調整技術を組み替えて、渋川・平賀型両面調整石器と砂川型・東内野型尖頭器を開発した。

多様な資源に適応し、多様な道具の開発を可能とした削片系両面調整技術とは、複数の狩猟民による技術知の複合であった。

キーワード：削片系両面調整技術、技術共有、面取尖頭器、面取彫器、有肩形面取尖頭器

## 1. 男女倉技法再考 —研究の課題と方法—

「彫刻器状石器」(信州ローム研究会 1972), 「木苳型グレイバー状石器」(鈴木 1975), 「男女倉型ナイフ形石器・男女倉型彫刻刀形石器・男女倉型搔器」(森嶋 1975), 「東内野型尖頭器」(篠原 1977), 「有樋尖頭器」(篠原 1980), 「樋状剥離を有する尖頭器」(川口 1988), 「樋状剥離を有する尖頭器・尖頭器素材彫器・尖頭器素材搔器」(伊藤 1989), 「有樋尖頭器・尖頭形彫刻刀形石器」(堤 1988, 1989), 「面取石槍」(田村 2000), 「左右非対称形槍先形尖頭器」(飯田 2006) と呼ばれてきた石器がある。

多様な用語が与えられた第一の要因は、両面調整技術による石器の整形前後に行われた削片剥離である。第二

の要因は、削片剥離された両面調整石器における多様な形態である。したがって、この特殊な石器を理解するためには、①何を目的として削片が剥離されたのか。②尖頭器・尖頭形・槍先形・ナイフ形・左右非対称形と呼称された形は如何なる形態であるのか。③削片剥離と両面調整石器の整形・再生技術との関係性とは何か。④削片剥離を特徴とした両面調整技術は如何にして開発されたか。という課題の解明が必要となる。

削片剥離とは、彫器の急角度刃部形成・細石刃核の打面形成に用いられた狭長削片剥離で、樋状剥離と呼ばれてきた。しかし、両面調整石器に用いられた削片剥離には、鋭角刃部を形成する幅広削片剥離が特徴的に存在していた。田村隆は、その幅広削片剥離を「面取り加工」(田村 2000) と呼んだ。ここで「面取り加工」を「面取

1 明治大学黒耀石研究センター

〒386-0601 長野県小県郡長和町大門 3670-8

\* 責任著者：須藤隆司 (sutou@mwb.biglobe.ne.jp)

剥離」と呼称すると、両面調整石器に施された削片剥離には、面取剥離と槌状剥離の二種類が存在し、特に面取剥離の目的が課題となる。

三宅(1980)・篠原(1980)は、面取剥離された削片を目的削片と考えた。削片を素材とする彫器が具体的に存在する。青森県大平山元II・III遺跡(青森県立郷土館1980,1981)で繰り返された面取剥離は、石器の製作・再生過程とともに一定量の削片生産を示している。削片剥離と両面調整技術の特徴とする札滑型・荒屋型細石刃技術(須藤2009)における削片・調整削片の素材利用と同等な課題である。

尖頭器とは如何なる形態であろうか。文字通りであれば先端の尖った石器ということになる。しかし、尖頭器・尖頭形・槍先形と呼称された形態には、先端が尖らない形態が数多く含まれている。その理由は、両面調整石器を尖頭器と呼称していたに過ぎない。尖頭器が石槍の機能を有するとするならば、槍先形とは如何なる形か。左右非対称形の槍先形などが存在するのであろうか。

着柄型狩猟具としての石槍を想定して、尖基柳葉形、円基木葉形、尖基有肩形等の形状にある尖鋭な先端と着柄部が整形された形態を尖頭器とし、面取剥離のある両面調整尖頭器を「面取尖頭器」と呼称しておこう。狩猟具としての石槍には、解体具を兼ねた突き槍(刺突・解体槍と呼称する)と投槍の存在が想定される。狩猟具としての規格は横断面面積40以上80mm<sup>2</sup>未満が投槍、80以上200mm<sup>2</sup>未満が突き槍(田村2011b)とされる。投槍具の存在は証明できないが、横断面面積には幅・厚の多様性と規格性が反映される。規格・量産化された狩猟具形態の存在を投槍として検討し、80mm<sup>2</sup>以上が主体で200mm<sup>2</sup>以上が存在する面取尖頭器の道具としての役割を問う。

森嶋(1975)は、「男女倉型ナイフ」を「刺突と切開を同時に期待できる」・「刃部を更新できる」器体と評価した。多機能で刃部再生が頻繁な両面調整石器には、尖頭器以外に「彫器」・「搔器」という多様な形態が含まれていた。尖頭器以外の削片剥離された形態を如何に捉えるか。道具形態においては工具としての多機能を備えた石器となるが、呼称法は難しい。槌状剥離によるものを彫器と呼ぶことには問題が少ないが、面取剥離された尖

頭器以外の両面調整石器をどのように呼称すれば良いか。大型品が多く未製品と評価される傾向にあるが、削片剥離後の先端整形を有した形態も多い。大型工具、あるいは削片石核として検討を要する。仮に「面取石器」と総称して注目しておこう。面取剥離は両面調整石器以外にも施される。「細原型彫器」(館野1982,鈴木1997)は、面取剥離された片面・周辺・側縁・端部調整石器である。彫器と分類された石器には面取剥離で刃部形成された形態が少なからず存在する。「神山型彫器」(菅沼1996)は面取剥離された彫器である。削片系両面調整石器群の特徴的な形態として「面取彫器」と呼んでおこう。

森嶋稔の提唱した「男女倉技法」(森嶋1975)を、田村隆は「男女倉両面体技法」(田村2008)として再構築した。田村の重要な提言は多岐にわたるが、①尖頭器以外にも諸種の石器が包括される。②石材消費に際して産出される削片群が分別的に選択利用される。③長距離移動に適応した技術である。④石刃生産と一体化している。ことを重要な視点として継承する。そして、面取剥離と槌状剥離という削片剥離技術を有する特殊性を最大限に評価し、「削片系両面調整技術」と呼称して、その技術構造を再検討してみよう。

従来は一般的にナイフ形石器から槍先形尖頭器が発生したと考えられていた(須藤1989)。それに対して、両面調整技術によりナイフ形石器の形態が改良され、「杉久保型・砂川型尖頭器」が開発されたという仮説を提示し、開発起源地を古北海道半島に求めた(須藤2005,2006)。旧石器時代の相対的な編年では、ナイフ形石器の後に槍先形尖頭器が出現する。したがって、ナイフ形石器を伴わない削片系両面調整石器群は、ナイフ形石器を伴う削片系両面調整石器群より後出である(角張・横山1993など)と考えられてきた。しかし、槍先形尖頭器の初期形態とされた「有槌尖頭器」を「削片系両面調整石器」と捉え直すと、古北海道半島にはナイフ形石器を伴わず細石刃を特徴とする削片系両面調整石器群が、槍先形尖頭器開発以前に存在していた。

古北海道半島の削片系両面調整技術を組み替えて、古本州島東北地域で開発された石器形態が「大平山元・男女倉型両面調整石器」であり、改良されたナイフ形石器が「杉久保型尖頭器」ではなかったのか。削片系両面調

整石器技術を組み替えて、南関東地域で改良されたナイフ形石器が「渋川・平賀型両面調整石器」, 「砂川型・東内野型尖頭器」ではなかったのか。最終氷期最寒冷期直後に古北海道半島・古本州島において、動植物の生息領域が改変される気候変動期が起こり、古北海道半島・古本州島の狩猟民たちは従来の遊動領域を大幅に改編した。新たな資源地で遭遇した狩猟民たちは技術情報を共有し、再編された遊動領域における動植物・石材資源に対応した様々な石器形態を開発した。その激動の石器製作技術の象徴が「削片系両面調整技術」であったのである。以下、このシナリオの可能性を、多様な石器形態相互における構造的関係性から紐解いてみよう。

## 2. 削片系両面調整石器の形態構造

### 2-1 両面調整石器

削片剥離以前の両面調整石器の状況が確認できる形態が、長野県男女倉遺跡 B 地点 (図 1.1・2, 和田村教育委員会 1975)・同ヘイゴロゴロ遺跡 (図 1.3・4, 川上ほか 1976), 栃木県上林遺跡第 I 文化層 (図 1.6, 佐野市教育委員会 2004) に残されている。

調整剥離面が不揃いのため、横断面形は甲高な半月形と器体中央稜の位置が偏ったレンズ形である。形状には柳葉形と木葉形がある。縁辺調整は弧状の背縁と上半部の斜行側縁 (図点線部) を特徴とする。斜行側縁は表面の調整が粗で裏面が精緻な傾向にある。削片剥離縁辺の整形に関わろう。弧状側縁は調整が精緻であり、両側縁が張り出した幅広木葉形も存在する (図 1.4)。甲高な形態は「男女倉型搔器」(森嶋 1975) とされたが、弧状側縁は工具刃部としての利用が検討される<sup>1)</sup>。ヘイゴロゴロ遺跡では、搔器刃部が形成された両面調整石器が確認されている (図 1.5)。

### 2-2 面取石器

削片剥離面を広く残した大型両面調整石器が、青森県大平山元 III 遺跡 (図 1.9, 青森県立郷土館 1981), ヘイゴロゴロ遺跡 (図 1.7), 上林遺跡 (図 1.8) にある。両面調整が粗い段階での削片剥離は、製作初期に削片剥離が行われていたことを示し、大型柳葉形両面調整石器

は、大型縦長削片の石核としての役割を兼ねていたことが知れる。面取剥離後に整形された形態は、大型工具としての利用と削片剥離の整形石核として検討される。茨城県細原遺跡 (図 1.10, 北茨城市史編さん委員会 1982) で同様な中型品が確認され、男女倉遺跡 B 地点では面取剥離後に尖端が整形された形態 (図 1.11・12) がある。

青森県大平山元 II 遺跡 (青森県立郷土館 1980; 蟹田町教育委員会 1992) では、最大幅が上部にある円端・尖基の特徴的な形態が数多く残されている。削片剥離後の顕著な再生が考えられる。尖基には欠損品もあり、尖頭器として使用が検討される (図 1.13)。

削片剥離後の円端整形は群馬県武井遺跡 (図 1.14, 岩宿フォーラム実行委員会 2004), 東京都吉祥寺南町三丁目遺跡 B 地点 (図 1.15, 吉祥寺南町遺跡調査団 1996) にあり、斜断整形が千葉県一本桜南遺跡 (図 1.16, 千葉県文化財センター 1998) にある。

斜断整形で先端が形成され、先端・削片剥離縁辺を工具機能部として検討できる大・中型粗製品が、大平山元 II 遺跡 (図 1.17), 千葉県角田台遺跡 (図 1.18, 千葉県教育振興財団文化財センター 2012), 長野県男女倉遺跡第 I 地点 (図 1.19, 信州ローム研究会 1972), 男女倉遺跡 B 地点 (図 1.20), 埼玉県西武蔵野遺跡 (図 1.21, 埼玉県埋蔵文化財事業団 1996), 神奈川県深見諏訪山遺跡第 IV 文化層 (図 1.22, 諏訪間・堤 1985) にある。これらには削片剥離の打面再生状態との評価も与えられる。

大平山元 II 遺跡 (図 1.23・24), ヘイゴロゴロ遺跡 (図 1.25) の大型形態は、斜断整形で明瞭な肩部を背縁に有する。基部側も斜断され刃部側に肩部を有した尖基形態 (図 1.23) という特殊な形態も存在する。これらには有肩形両面調整石器との技術共有を示唆している。

### 2-3 面取彫器

面取剥離で刃部が形成された両面・片面・周辺・側縁・端部調整石器である。斜断ないし弧状整形された上端部から斜めに面取剥離を施したものが主体である (図 2.1～5)。面取剥離後に槌状剥離で刃部再生したもの (図 2.6), 両端に面取剥離で刃部が形成されたもの (図 2.7～13), 両端刃部が面取剥離と槌状剥離によるもの (図 2.14～16), 下端に搔器刃部が形成されたもの (図 2.17

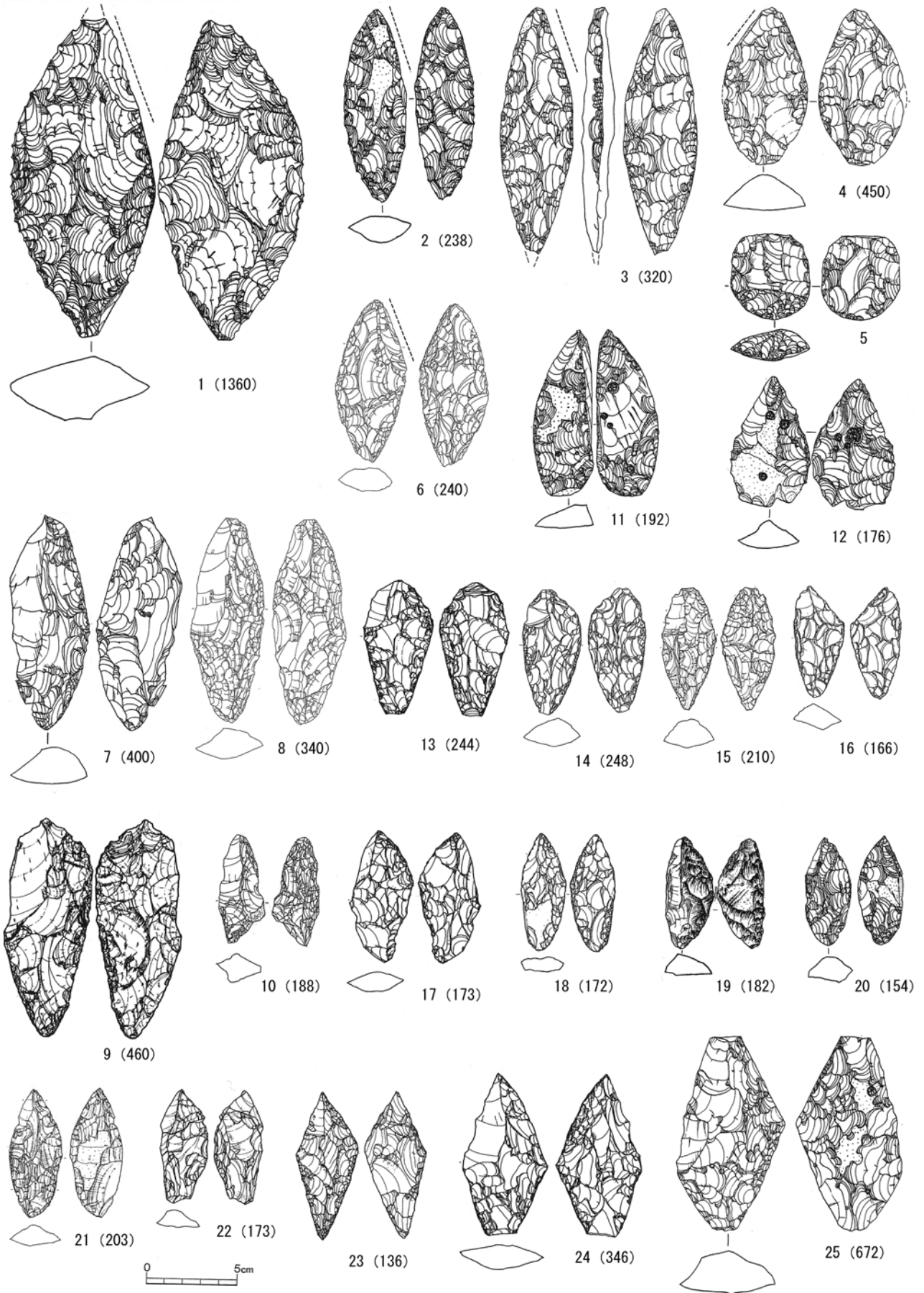


図1 両面調整石器と面取石器の形態構造 (縮尺 1/3) ( ) 横断面積, 単位はmm<sup>2</sup>

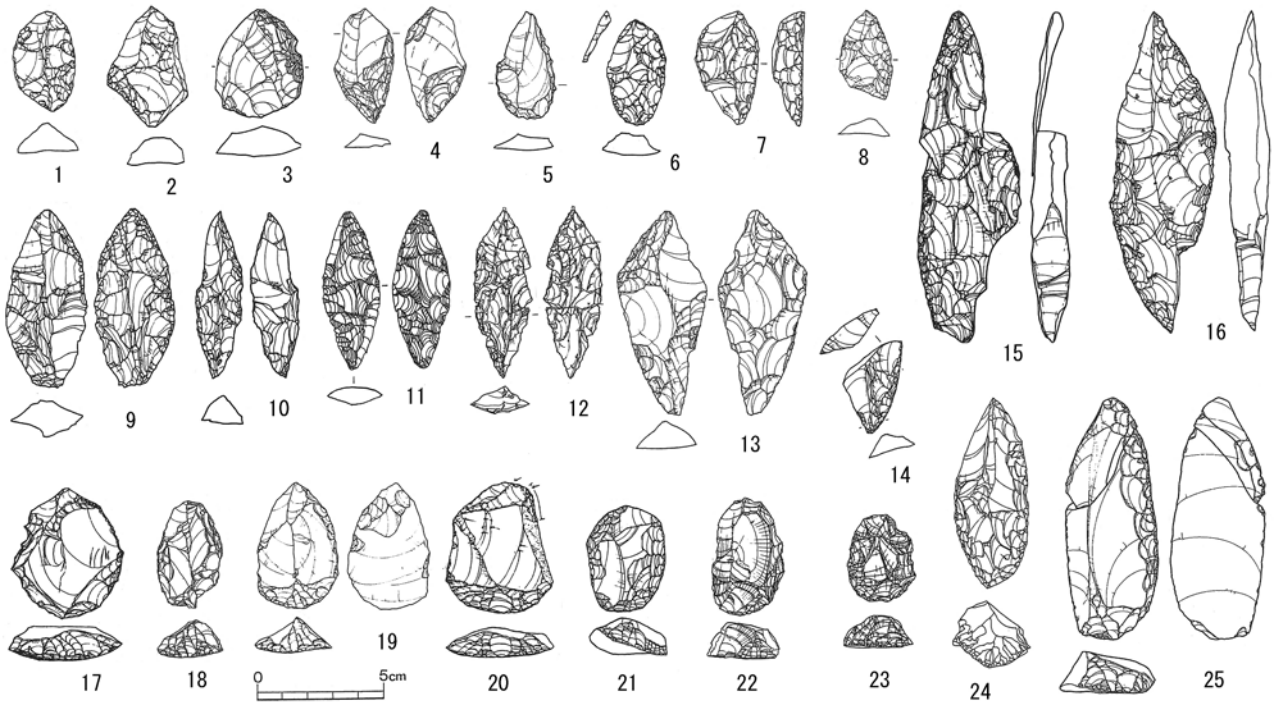


図2 面取彫器の形態構造 (縮尺 1/3)

～25) などの多様な形態が存在する。

大平山元II遺跡(図2.9・10・16・17), 大平山元III遺跡(図2.15), 新潟県すぐね遺跡(図2.20, 佐藤2002), 長野県貫ノ木遺跡(図2.13, 長野県埋蔵文化財センター2000a), 男女倉遺跡B地点(図2.11), 細原遺

跡(図2.7・23・24), 群馬県下触牛伏遺跡(図2.1・2・6・19, 群馬県埋蔵文化財調査事業団1986)・同富田下大日遺跡(図2.3・21, 群馬県埋蔵文化財調査事業団2008)・同今井三騎堂遺跡(図2.14, 群馬県埋蔵文化財調査事業団2004), 千葉県三崎3丁目遺跡(図2.8, 道沢2000),

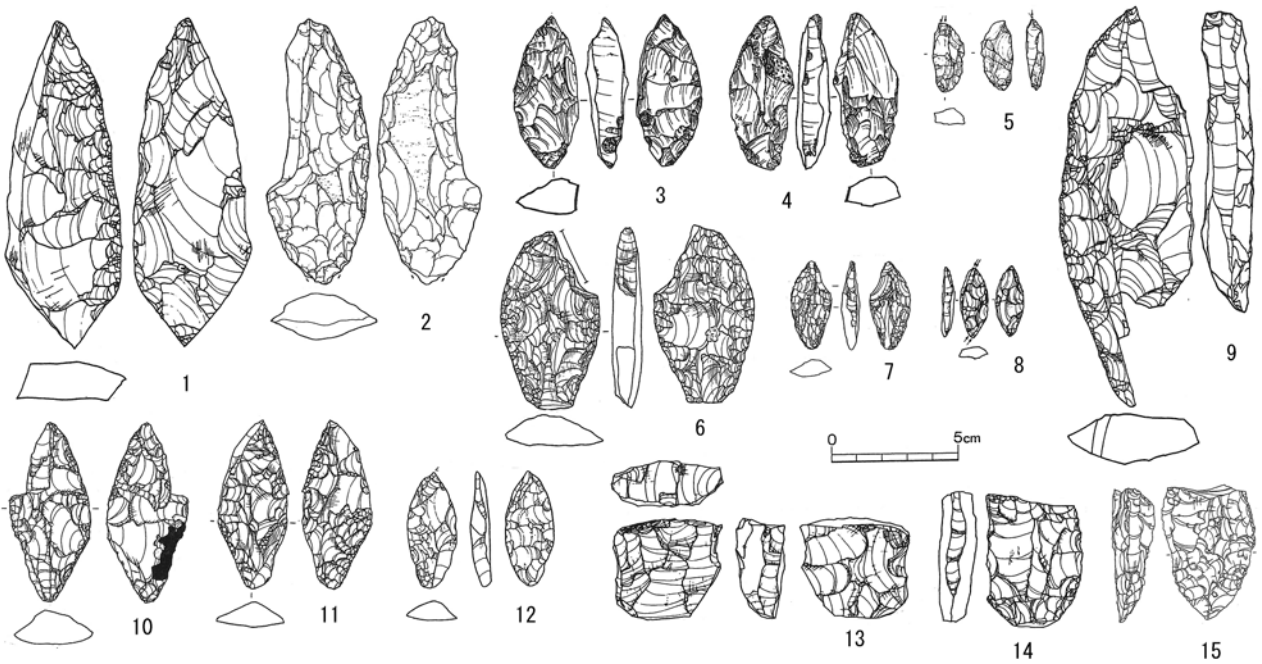


図3 両面調整彫器の形態構造 (縮尺 1/3)

角田台遺跡（図 2.25）、一本桜南遺跡（図 2.18）、西武蔵野遺跡（図 2.22）、東京都下柳沢遺跡（図 2.12、国武 2000）・同堂ヶ谷戸遺跡（図 2.4、世田谷区教育委員会 2000）・同国分寺関連遺跡・武蔵台遺跡第 5 文化層（図 2.5、東京都埋蔵文化財センター 2010）で確認されている。

## 2-4 両面調整彫器

剥離が側縁末端に及び細石刃核の削片剥離に類似した大・中型形態が、大平山元 II 遺跡（図 3.1）、男女倉遺跡第 III 地点（図 3.3・4、信州ローム研究会 1972）にあり、小型形態が千葉県空港 No.7 遺跡（図 3.5、千葉県文化財センター 1984）ある。栃木県西赤堀遺跡（図 3.2、栃木県文化振興事業団 1996）の槌状剥離も中央を越える。上半部までの複数回剥離は、群馬県神保富士塚遺跡（図 3.6、群馬県埋蔵文化財事業団 1993）、東京都丸山東遺跡（図 3.7、東京都外かく環状道路練馬地区調査会 1995）にある。

大平山元 II 遺跡には両側縁において両端からの複数回の剥離が行われた形態（図 3.9）が特徴的に存在する。両端・両側縁に剥離が施された形態は、貫ノ木遺跡（図 3.10・11）、千葉県平賀一ノ台遺跡（図 3.8、平賀遺跡群発掘調査会 1985）、東京都府中市 No.29 遺跡（図 3.12、

東京都埋蔵文化財センター 1996）で確認されている。

大平山元技法 B（図 3.13、三宅 1980）とされた分割両面調整石器を素材とした槌状剥離・面取剥離が、新潟県樽口遺跡 A-KSE 文化層（図 3.14、新潟県朝日村教育委員会 1996）、上林遺跡（図 3.15）、千葉県草刈遺跡（千葉県文化財センター 2005）で確認されている。槌状剥離の目的として小石刃剥離が検討される。

## 2-5 彫器

刃部形成位置が片側縁、両側縁、両端、交差刃と多様である。斜刃が主体であるが横刃・直刃と多様であり裏面に及ぶ鈍角刃部も今井三騎堂遺跡（図 4.4）、神奈川県大和配水池内遺跡第 VI 文化層（図 4.5、大和市 No.199 遺跡発掘調査団 2008）などに特徴的に存在する。

特殊な形態は、荒屋型彫器と同様な刃縁稜上調整が施された鈍角彫器で、大平山元 II 遺跡（図 4.1）、角田台遺跡（図 4.2・3）で確認されている。両端に槌状剥離があるものは貫ノ木遺跡（図 4.12・13）に大型品があり、平賀一ノ台遺跡（図 4.8・9）・三崎 3 丁目遺跡（図 4.10・11）に多様な形態がある。

搔器の基部に槌状剥離した形態は、男女倉遺跡 J 地点（図 4.14、和田村教育委員会 1975）、長野県東裏遺跡

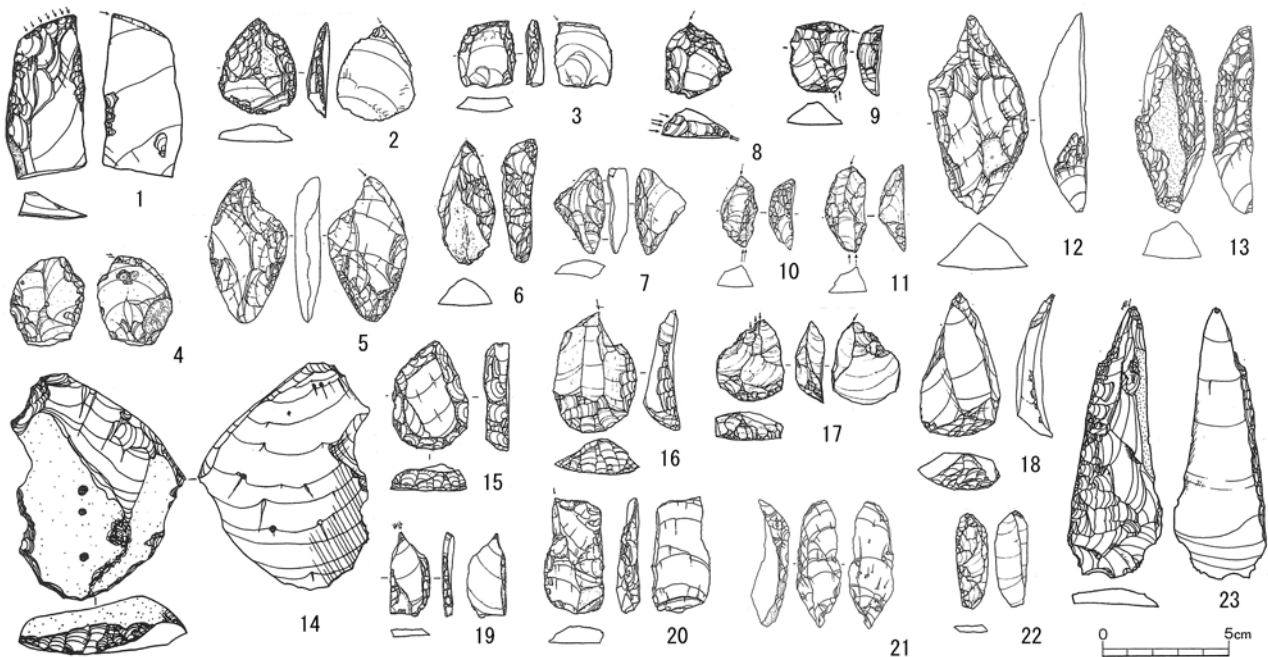


図 4 彫器の形態構造（縮尺 1/3）

(図 4.15, 長野県埋蔵文化財センター 2000b), 平賀一ノ台遺跡(図 4.16・17), 今井三騎堂遺跡(図 4.18)にある。削片を素材とするものは, 大平山元 II 遺跡(図 4.23), 細原遺跡(図 4.20), 上林遺跡(図 4.21), 一本桜南遺跡(図 4.19), 下触牛伏遺跡(図 4.22)で確認されている。大平山元 II 遺跡, 細原遺跡, 今井三騎堂遺跡(図 4.6), 平賀一ノ台遺跡では, 多様な形態が量産され多量の削片が残されている。三崎 3 丁目遺跡では, 槌状剥離された有肩形両面調整石器(図 4.7)が確認されている。

## 2-6 厚型面取尖頭器

幅広で厚型の尖頭器であり, 横断面面積が 80 ~ 500 mm<sup>2</sup>にある。長幅比 3 以上で最大幅が上部・中部にある尖基柳葉形の両面調整石器が, 岩手県下嵐江 I・II 遺跡(図 5.2, 岩手県文化振興事業団 2013), 長野県仲町遺跡(図 5.1, 長野県埋蔵文化財センター 2004), 上林遺跡(図 5.3・6), ヘイゴロゴロ遺跡(図 5.4), 群馬県天引狐崎遺跡(図 5.5, 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994), 東京都武蔵国分寺跡遺跡北方地域(図 5.7, 東京都埋蔵文化財センター 2003)等で確認されている。背縁上部が直線的で張り出しの弱い肩部を有する形態がある(図 5.2・6)。最大幅が上半部にあるものには基部尖端(図 5.3)が存在する。

長幅比 1.7 ~ 2.7 の上部・中部・下部に最大幅のある尖基ないし円基木葉形の両面調整石器が, 大平山元 II 遺跡(図 5.11), 福島県赤柴遺跡(山元 2012), すぐね遺跡(図 5.8), 貫ノ木遺跡(図 5.12), 群馬県三ツ木東原遺跡(図 5.10, 中島・軽部 1993)・同千鳥遺跡(図 5.9, 阿久澤 2004), 武井遺跡(図 5.25), 埼玉県箆原裏遺跡(図 5.19, 村松 1997), 茨城県前谷東遺跡(図 5.20, 土浦市教育委員会 1998), 千葉県復山谷遺跡(図 5.24, 千葉県文化財センター 1982)・同北長山野遺跡(図 5.13, 北長山野遺跡調査会 1990), 角田台遺跡(図 5.14・15), 東京都武蔵国分寺関連遺跡・武蔵台遺跡第 4 文化層(図 5.26, 東京都埋蔵文化財センター 2010)・同江戸城北丸竹橋門地区(図 5.27, 東京国立近代美術館遺跡調査委員会 1991), 神奈川県中村遺跡第 V 文化層(図 5.23, 中村遺跡発掘調査団 1987)・同横山 5 丁目遺跡第 II 文化層(図 5.21, 相模原市立屋内水泳場建設事業地内遺跡調査団 1997)・同上草柳遺跡第 3 地点(図 5.22, 大和市教育

委員会 1984), 静岡県広合遺跡(図 5.18, 沼津市教育委員会 1987)・同桜畑上遺跡第 VII 文化層(図 5.16, 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009), 桜畑上遺跡第 V 文化層(図 5.17, 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010)等で確認されている。

先端・基端が器体中央に位置し, 最大幅で側縁が弧状に張り出した形態が特徴である。基部円端が主体で円基がある。張り出し部の屈曲が明確で菱形を呈する形態も特徴的に存在する(図 5.19・20)。背縁上部整形では挟入状整形が特徴となり, 器体中央に明瞭な尖端が形成される形態が特徴的である(図 5.22 ~ 24)。長幅比 2 未満の中・小型品(図 5.26・27)は再生が繰り返された形態と考えられよう。

## 2-7 薄型面取尖頭器

半両面・片面・周辺調整の中・小型木葉形尖頭器であり, 横断面面積 60 ~ 80 mm<sup>2</sup>を主体とする。千葉県取香和田戸遺跡(図 5.28, 千葉県文化財センター 1994)・同上貝塚貝塚(図 5.29・30, 千葉県文化財センター 1996)・同五本松 No.3 遺跡(図 5.31・32, 千葉県文化財センター 2003)・同南河原坂第 3 遺跡(図 5.33, 千葉市文化財調査協会 1996)・同大林遺跡(図 5.34, 千葉県文化財センター 1989)等で確認されている。

## 2-8 有肩形両面調整石器

長野県星糞峠遺跡(図 6.1, 飯田・井上 2006)・同渋川遺跡(図 6.2 ~ 4, 尖石博物館 1962; 守矢・斎藤 1986)に有肩形両面調整石器が残されている。板状礫・剥片を素材とする。扁平な半月形と器体中央稜の位置が偏ったレンズ形の横断面形にある両面・半両面調整形態であり, 上部・中部・下部に肩を有する。円基ないし尖基であるが, 先端部と基部の区別が不明瞭である。斜刃部・背縁の整形が精緻であり, 削器としての機能的要件を有する形態が存在する。特殊な形態としては, 端部に刃部が形成された搔器(図 6.5)がある。また, 複数回の槌状剥離が施された形態が渋川遺跡(図 6.6)で確認されている。

## 2-9 有肩形面取石器

面取剥離後に先端整形された大型有肩形両面調整石器

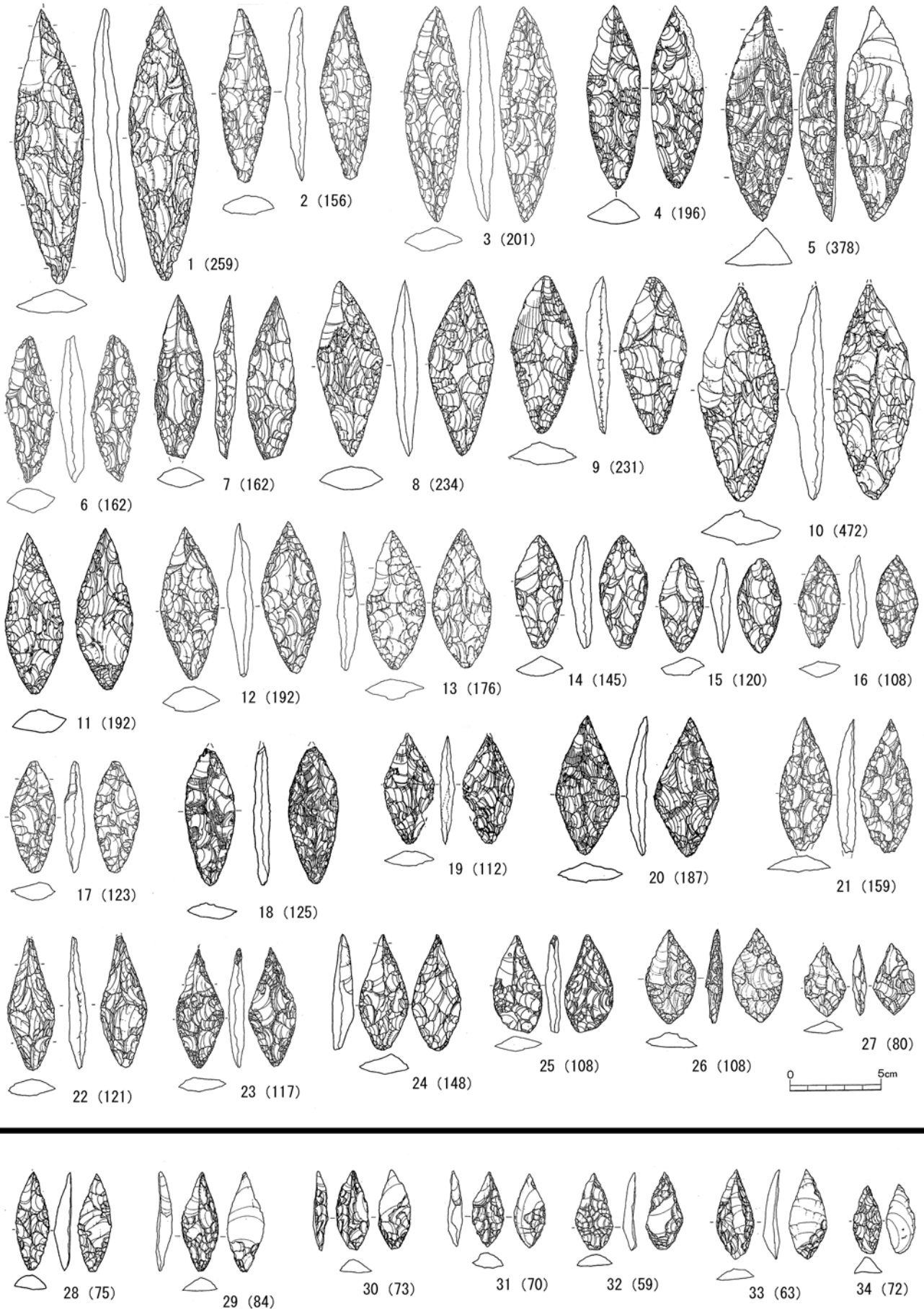


図5 面取尖頭器の形態構造 (縮尺 1/3) ( ) 横断面面積, 単位はmm<sup>2</sup>



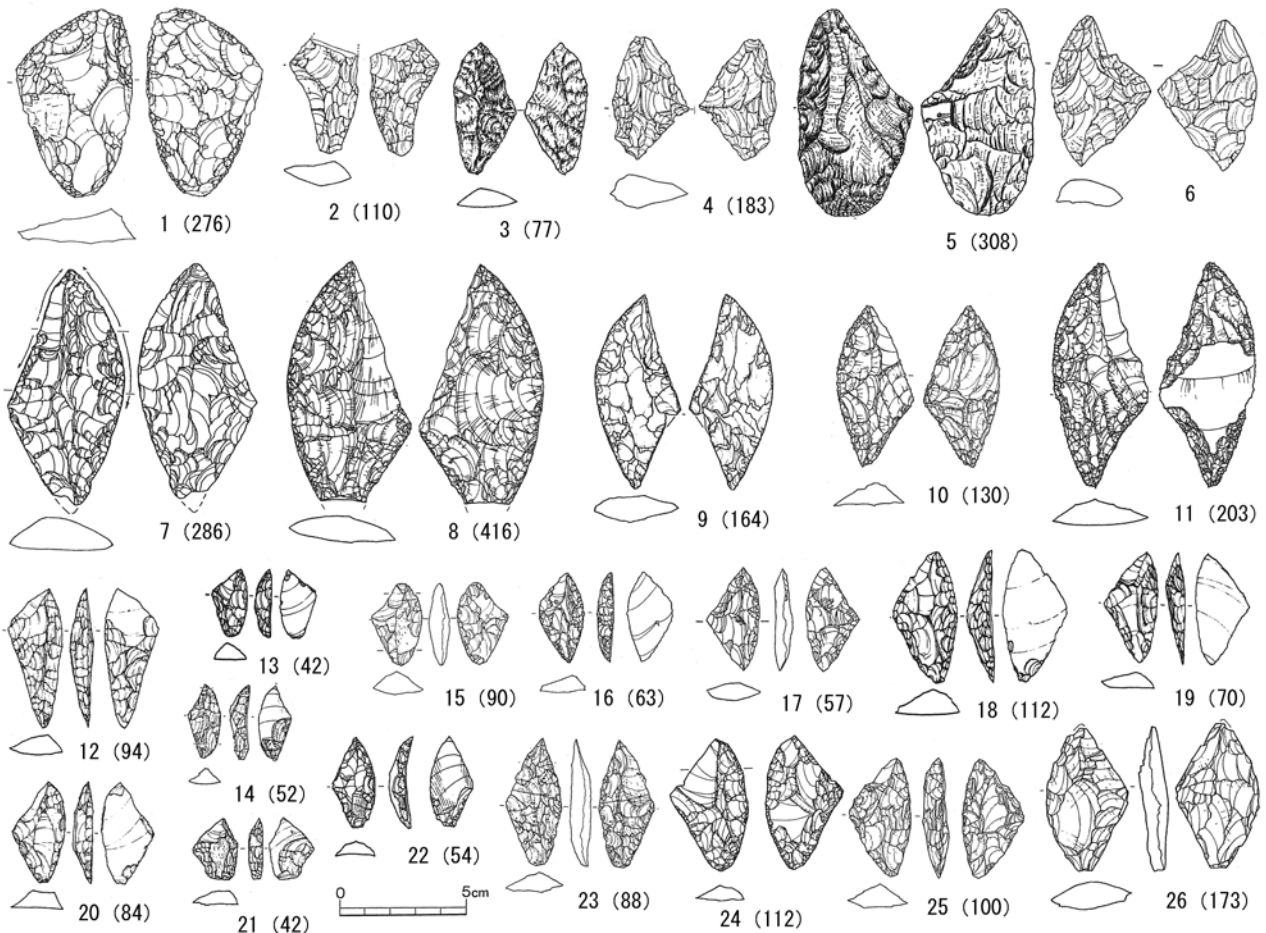


図6 有肩形両面調整石器と有肩形面取石器の形態構造 (縮尺 1/3) ( ) 横断面積, 単位はmm<sup>2</sup>

が、栃木県島田遺跡 (図 6.7, 川田 1991), 埼玉県城山南遺跡 (図 6.8, 和光市遺跡調査会 1994), 東京都坂上遺跡 (図 6.9, 三鷹市遺跡調査会 1985), 千葉県東内野遺跡 (図 6.10・11, 千葉県史料研究財団 2003) で確認されている。弧状に張り出した背縁整形が特徴である。東内野遺跡の大型品は基部整形が明瞭な尖頭器であるが、再生による基部・先端の交換が指摘されている (宇田川 2000)。

両面・半両面・片面調整の中・小型品が、星糞峠遺跡 (図 6.16), 渋川遺跡 (図 6.17), 男女倉遺跡 (図 6.26, 和田村教育委員会 1993), 今井三騎堂遺跡 (図 6.24), 平賀一ノ台遺跡 (図 6.12・13, 18~21), 三崎3丁目遺跡 (図 6.15・23), 埼玉県中砂遺跡 (図 6.14, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986), 東京都葛原遺跡B地点第II文化層 (図 6.25, 練馬区遺跡調査会 1987), 神奈川県吉岡遺跡群 (図 6.22, かながわ考古学財団 1998) 等で確認されている。

剥片素材の半両面・片面調整が多い。肩部が上部・中

部に位置し、肩部の角度が直角に近いものが主体である。主軸と素材剥離軸の角度が大きく、先端部が背縁側に偏る。背縁が弧状整形・肩部下方が斜断整形で基端部は円端ないし尖端である。尖頭器としての利用が検討できるが、大きさの格差と刃部・基部形状が多様で投槍としての規格性は低い。

### 2-10 背縁有肩形面取尖頭器

背縁中部に肩を有することを特徴とした、両面・半両面・片面調整の中・小型木葉形尖頭器である。

神奈川県大和市 No.210 遺跡第II文化層 (図 7.1, 盤古堂考古学研究所 1999), 大和配水池内遺跡 (図 7.2), 千葉県境外II遺跡 (図 7.3・4, 松戸市教育委員会 2000), 東京都恋ヶ窪東遺跡 (図 7.5, 上敷領・国武 2001)・同城山遺跡 (図 7.7・8, 調布市教育委員会 1982), 府中市 No.29 遺跡 (図 7.6) で確認されている。

横断面積 40~80 mm<sup>2</sup>の投槍規格が存在する。大和

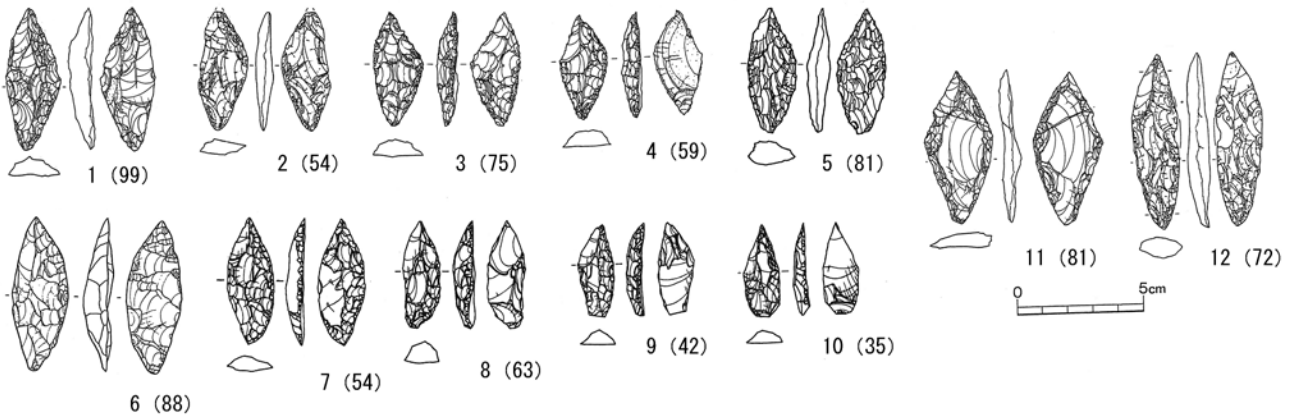


図7 背縁有肩形面取尖頭器の形態構造 (縮尺 1/3) ( ) 横断面面積, 単位はmm<sup>2</sup>

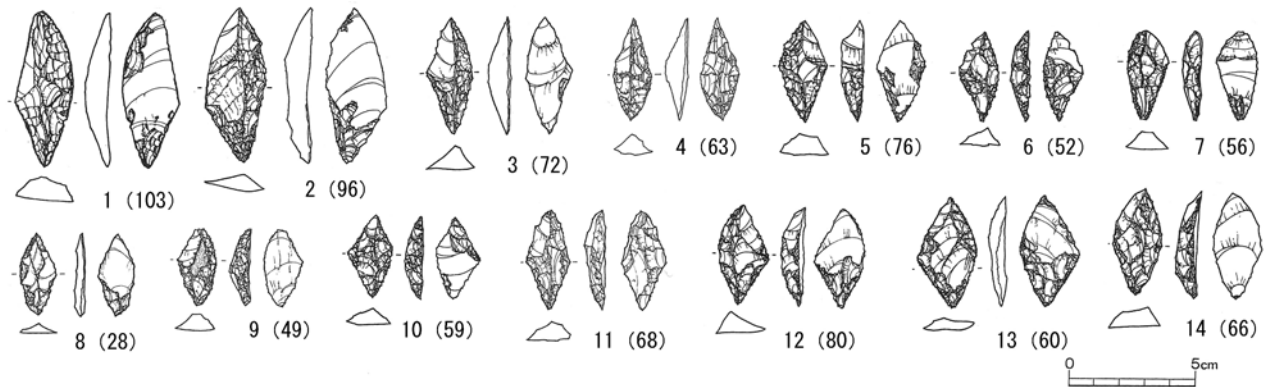


図8 有肩形面取尖頭器の形態構造 (縮尺 1/3) ( ) 横断面面積, 単位はmm<sup>2</sup>

市 No.210 遺跡では刃部側に肩部を有し菱形を呈する形態 (図 7.11) が伴い、城山遺跡では肩部の張り出しが弱い、刃部側上・中部に肩を有する形態 (図 7.9・10) が伴う。大和配水池内遺跡では投槍規格にある尖基柳葉形面取尖頭器 (図 7.12) が確認されている。

### 2-11 有肩形面取尖頭器

栃木県宮之前遺跡 (図 8.1, 上野 1987), 東内野遺跡 (図 8.2 ~ 14), 千葉県木戸先遺跡 (印旛郡市文化財センター 1994) に面取剥離された尖基有肩形尖頭器がある。

「東内野型尖頭器」と呼称できる有肩形面取尖頭器の特徴は、以下に整理される。

縦長剥片を素材とした半両面・片面調整形態が主体である。半両面形態は打瘤部を除去した裏面基部調整が特徴となる。刃部側中部に肩を有する形状を主体とする。下部に肩を有する形状も基部が長く着柄部が明確である。先端・基部が器体中央に位置し、肩の張り出しが弱い木葉形が含まれる。基部整形に抉入状整形があり、基

部尖端が特徴的に存在する。中・小型の規格品が量産され、横断面面積の主体は 40 ~ 80 mm<sup>2</sup> の投槍規格にある。

### 3. 削片系両面調整石器群の技術構造

削片剥離された両面調整石器の諸形態における技術構造を整理すると、削片系両面調整石器群は、以下の 5 群に大別できる。

#### 3-1 大平山元・男女倉型両面調整石器群

東北地域、常総台地、下野台地、下総台地では、大平山元 II・III 遺跡、下嵐江 I・II 遺跡、赤柴遺跡、細原遺跡、上林遺跡、西赤座遺跡、角田台遺跡、一本桜南遺跡、空港 No.7 遺跡に、東北産頁岩を主体とした石器群が残される。

中部日本海地域、野尻湖周辺丘陵、中部高地、赤城山麓、武蔵野台地、下総台地では、すぐね遺跡、貫ノ木遺

跡、仲町遺跡、ヘイゴロゴロ遺跡、男女倉遺跡群、神保富士塚遺跡、富田下大日遺跡、西武蔵野遺跡、草刈遺跡に信州産黒曜石を主体とした石器群が残されている。

大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡を典型とする削片剥離技術には、面取剥離と槌状剥離がある。面取剥離は繰り返され、両面調整石器の整形・再生調整とともに幅広削片の生産を兼ねる。幅広削片は彫器の素材とされ、刃器としての使用が想定される。大型面取石器には先端・削片剥離縁辺・弧状側縁に機能部が想定できる工具が多い。先端形成には背縁上部の斜断整形が特徴的に用いられる。

柳葉形・木葉形の面取尖頭器は、基部整形から着柄道具と考えられる。横断面面積は100～400mm<sup>2</sup>と大きく、石核を兼ねる刺突・解体槍のサイズが主体である。保有は少なく、量産された投槍とは明らかに性質を異とする。山刀のように狩猟具・解体具・工具と多目的に使用された携行・管理道具と考えられる。

削片剥離再生による形状修正により、基部側両側縁が斜断調整され尖基が整形されたと考えられる形態がある。この形態では基部側を先端とした利用が想定できる。先端・基部を入れ替えた使用法は、両端に削片剥離（面取剥離・面取剥離と槌状剥離の組み合わせ）された形態の存在に示され、多様な使用法を提示している。

面取彫器と呼称した面取剥離で刃部を形成・再生した片面・周辺・側縁・端部調整石器が特徴的に存在する。両端の刃部形成・端部の搔器刃部形成があり、工具としての多様な使用法が伺える。

槌状剥離では両面調整石器の側面に刃部を形成した工具がある。刃部再生が行われ複数の槌状剥離面を有する形態、両端に刃部が形成された形態が特徴的に存在する。大型～小型と多様なサイズがあり、目的に応じた多様な使用法が考えられる。槌状剥離による小石刃生産とその利用法も検討される。

周辺・側縁・端部調整石器に槌状剥離で刃部を形成・再生した彫器では、類荒屋型彫器と削片素材彫器の存在が特質で、鈍角刃部を含む多様な刃部を有する形態の量産が、工具としての必要性を示唆している。

形態構成から、刃部再生と削片利用を特徴とした工具主体の広域遊動型石器群と評価できる。投槍形態の製作が低調で彫器の量産を評価すると、狩猟具の主体が骨角

製尖頭器であった可能性を指摘できる。

### 3-2 渋川・平賀型両面調整石器群

中部高地、赤城山麓、下総台地の星糞峠遺跡、渋川遺跡、今井三騎堂遺跡、下触牛伏遺跡、平賀一ノ台遺跡、三崎3丁目遺跡に、信州産黒曜石主体、東北産頁岩主体、チャート等の在地石材を主体とした有肩形両面調整石器群が残されている。

大型形態は工具的性格が強い。大型の幅広削片も一定量存在し、面取剥離による再生と削片利用が指摘でき、削片素材の彫器も存在する。小型形態は半両面・片面調整が主体的で、横断面面積40～80mm<sup>2</sup>の尖基形態があり投槍利用が検討できる。ただし、先端が背縁側に偏る斜刃形態が主体で投槍としての規格・量産は低調である。

面取尖頭器よりも面取・槌状剥離による半両面・片面・周辺・側縁・端部調整彫器の形態的多様性と量産が特徴である。各種の剥片を素材とし、槌状剥離で刃部を形成・再生した彫器では、両端の刃部形成・端部の搔器刃部形成があり、多様な刃部を有する形態が量産されている。

大型良質素材に限定的な両面調整技術から、多様な石材・剥片に適応した技術への組み替えが指摘できる。

平賀一ノ台遺跡、三崎3丁目遺跡、渋川遺跡では、上部・中部に肩を有する多様な切出形石器やナイフ形石器が存在し、下触牛伏遺跡では砂川型尖頭器（須藤2005）の存在が検討される。

### 3-3 背縁有肩形面取尖頭器石器群

武蔵野台地、相模野台地、下総台地の府中市 No.29 遺跡、城山遺跡、恋ヶ窪東遺跡、大和市 No.210 遺跡、大和配水池内遺跡、境外Ⅱ遺跡に、東北産頁岩、信州産黒曜石、ガラス質黒色安山岩、チャート等の多様な石材を用いた石器群が残されている。

背縁に肩部を有する面取尖頭器が特徴的形態である。半両面調整も多く、横断面面積40～80mm<sup>2</sup>の投槍規格形態が製作される。大型両面調整石器、面取彫器は減少する。

府中市 No.29 遺跡に有肩形面取尖頭器と有肩形石器、城山遺跡に明花向型尖頭器（須藤2006）、大和排水池内遺跡に砂川型尖頭器が存在する。

### 3-4 木葉形面取尖頭器石器群

下総台地の取香和田戸遺跡，上貝塚貝塚，五本松 No.3 遺跡，南河原坂第3遺跡，大林遺跡に，高原山・信州産黒曜石，白滝頁岩，黒色頁岩，ガラス質黒色安山岩，チャート等の多様な石材を用いた石器群が残されている。

半両面・片面・周辺調整の中・小型木葉形面取尖頭器の製作が特徴である。横断面積 40～80 mm<sup>2</sup>の投槍規格が主体となる。南河原坂第3遺跡で砂川型尖頭器との共存が検討できる。

### 3-5 東内野型尖頭器石器群

下総台地，下野台地の東内野遺跡，木戸先遺跡，宮之前遺跡に，東内野型尖頭器を指標とする白滝・鹿股沢産頁岩，信州産黒曜石，ガラス質黒色安山岩，流紋岩等の多様な石材を用いた石器群が残されている。

東内野遺跡にはガラス質黒色安山岩による面取石器(田村 2008)，大型刺突・解体槍があるが，投槍化された尖基有肩形面取尖頭器の量産が特質である。

## 4. 削片系両面調整石器の地域技術適応

### —技術の共有と組み替え—

#### 4-1 渋川・平賀型両面調整石器の開発

東京都比丘橋遺跡 B 地点(図 9.1，比丘尼橋遺跡調査団 1993)，神奈川県高座渋谷団地遺跡(図 9.2，県営高座渋谷団地内遺跡発掘調査団 1995)・同下九沢山谷遺跡(図 9.3，中村 1979)にある両面調整石器の特徴は，肩部を中央ないし下部に有した半両面調整の有肩形石器である。刃部は削片縁辺で削片剥離はない。弧状背縁と斜刃・斜断整形の基部から構成される。東京都下原・富士見町遺跡(図 9.4，明治大学校地内遺跡調査団 2011)では，

同形状の刃部が面取剥離で形成されている。これらの形態的特徴は，渋川・平賀型両面調整石器の特徴である。肩部が中央にあるものは上下が同様な形状にあり，肩部が上部にあるものは刃部が短く，下部にあるものは基部が短い。これらは先端・基部を入れ替えた形状であり，固定的な形状形成を示さない。同形は樽口遺跡 A-KSE 文化層(図 9.5)，東裏遺跡(図 9.6・7)に求められる。

以上の形態は V・IV 下層段階の石器群にあり，砂川期以前である。その段階にある両面調整石器は刃部・基部に多様性を有し，規格的な着柄尖頭器ではなかった。器体上部・中部・下部に肩を有し刃部・基部が多様な形態的特徴は，V・IV 下層段階で開発された切出形石器の特徴である。この形態的類似性により，切出形石器から両面調整石器という新たな形態が開発されたと想定していた(須藤 1989)。しかし，事実は逆であり，削片系両面調整技術により切出形石器の製作方法が組み替えられ，多様な有肩形両面調整石器が開発されたとは考えられないであろうか<sup>2)</sup>。

東北地域から常総-下野-下総台地，中部日本海地域から野尻湖周辺丘陵-中部高地-赤城山麓の広域領域において，大平山元・男女倉型技術を特徴とする削片系両面調整石器群が残された。大平山元・男女倉型技術とは，面取剥離と槌状剥離という削片剥離技術を駆使して，両面調整石器の再生利用と削片利用という長期的資源管理と広域遊動を可能とした技術であった。大型両面調整石器の資源を補うように，小型の剥片を素材として面取・槌状剥離で多様な刃部を形成・再生した彫器が開発されていた。

大平山元・男女倉型両面調整石器群の放射性炭素年代は，赤柴遺跡で 20340 ± 60 ~ 20090 ± 70 <sup>14</sup>C yr BP (山元 2012)，富田下大日遺跡で 20020 ± 70 ~ 19670 ± 60 <sup>14</sup>C yr BP (群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008)である。B1 層下部にある砂川型尖頭器石器群の放射性炭素年代

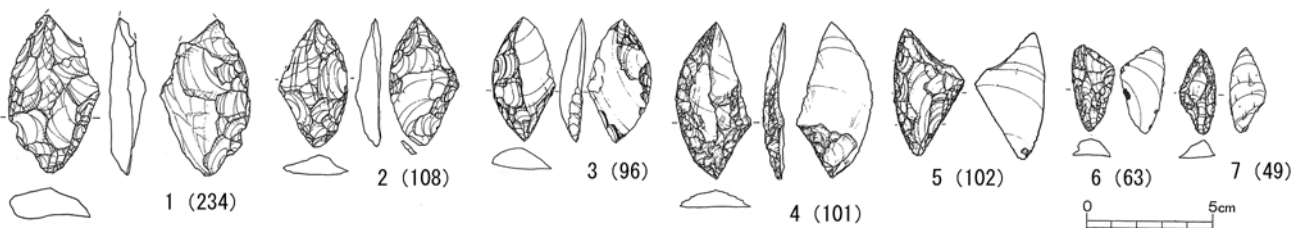


図 9 V・IV 下層段階の有肩形石器(縮尺 1/3) ( ) 横断面積，単位は mm<sup>2</sup>

は、神奈川県福田丙二ノ区遺跡第 II 文化層で  $19660 \pm 440 \sim 18770 \pm 330$   $^{14}\text{C yr BP}$ 、宮ヶ瀬上原遺跡で  $19470 \pm 100 \sim 19240 \pm 100$   $^{14}\text{C yr BP}$ 、用田鳥居前遺跡で  $19740 \pm 190 \sim 17910 \pm 130$   $^{14}\text{C yr BP}$  (工藤 2012) である。以上の測定年代は、大平山元・男女倉型両面調整石器群が砂川期以前に存在していたことを示唆している。つまり、V・IV 下層段階に東北地域・中部高地・北関東地域を遊動領域とした削片系両面調整石器を装備とした狩猟民 (以下、削片系両面調整石器狩猟民) が、南関東地域を遊動領域とした切出形石器を装備とした狩猟民 (以下、切出形石器狩猟民) に対峙していた可能性が高いのである。

南関東地域の狩猟民が信州黒曜石原産地を再利用し、東北南部から下総台地の遊動領域が再構築されるのは V・IV 下層段階終末期 (国武 2003) である。信州黒曜石原産地と下総台地を共有の遊動領域とした削片系両面調整石器狩猟民と切出形石器狩猟民は、資源を共有し双方の技術情報を交換・共有したと考えられる。大平山元・男女倉型技術を共有した切出形石器狩猟民は、切出形石器の製作技術を削片系両面調整技術に組み替えた。切出形石器の製作技術を共有した削片系両面調整石器狩猟民は、剥片素材の半両面・片面調整技術に切出形状を組み入れた。それが渋川・平賀型両面調整石器開発要因と考えられる<sup>3)</sup> (図 10)。

#### 4-2 砂川型・東内野型尖頭器の開発

面取尖頭器の投槍化を図った過渡的な形態として、相模野台地の大和市 No.210 遺跡・大和配水池内遺跡ではガラス質黒色安山岩で、武蔵野台地の府中市 No.29 遺跡・城山遺跡では信州産黒曜石で、背縁有肩形面取尖頭器が開発されていた。その技術改革の主体者が南関東地域へ参入した削片系両面調整石器狩猟民か、南関東地域の狩猟民かは特定できないが、砂川期以前あるいは初期に武蔵野・相模野台地で面取投槍が開発されていた事実を示唆する。しかし、武蔵野台地・相模野台地を主要な遊動領域とした狩猟民たちは、面取尖頭器の投槍化を進展することなく、削片系両面調整技術に構造化されていた石刃技術を選択し、在地石材に適応した砂川型尖頭器を開発した (須藤 2005)。砂川型尖頭器とは、面取石器の木

葉形と有肩形を投槍化した尖頭器であった (図 10)。

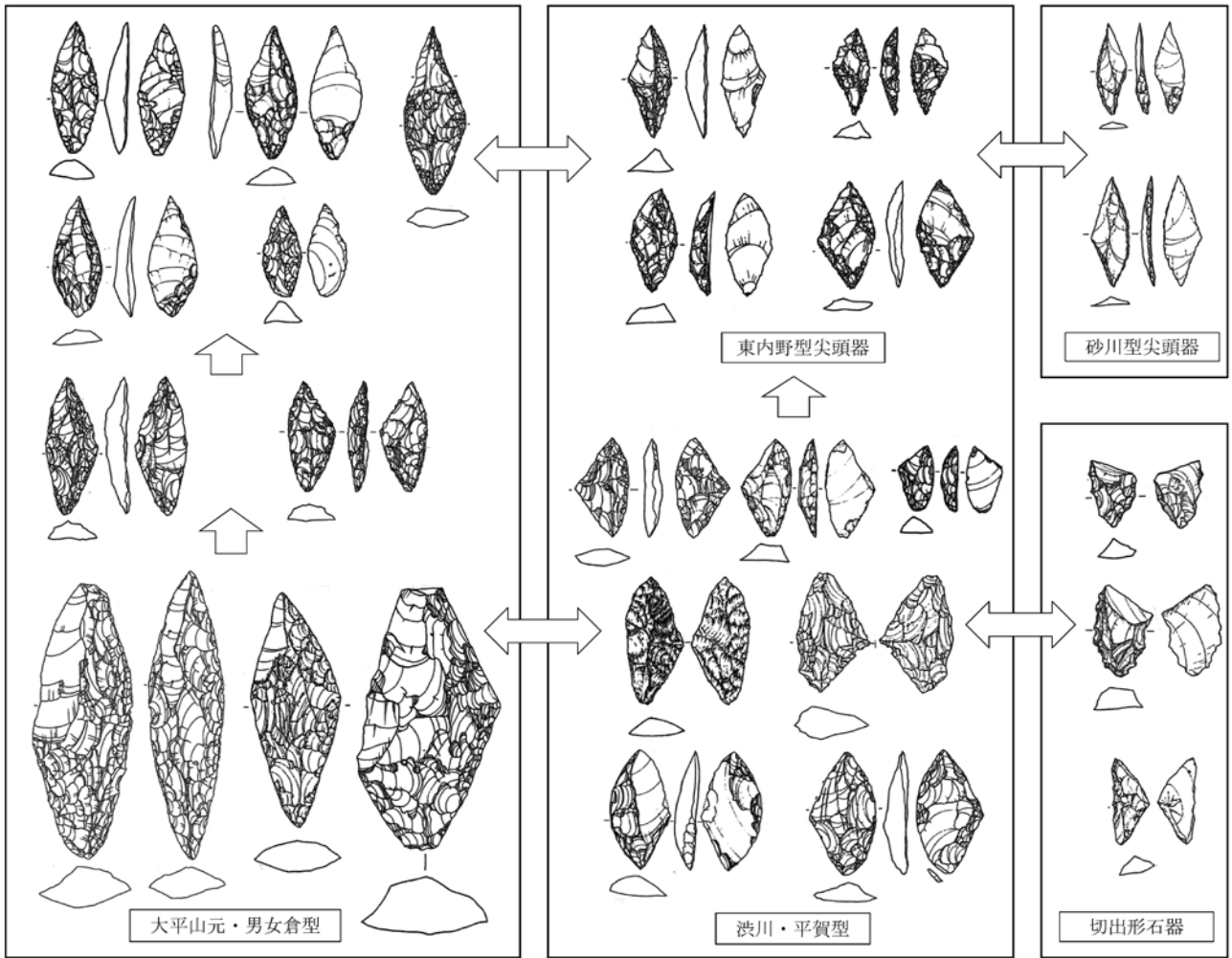
一方、削片系両面調整石器狩猟民の遊動領域に組み込まれていた下総台地では、東北産頁岩を用いた背縁有肩形尖頭器の開発が境外 II 遺跡で示され、下総台地の石材で投槍化が更に進んだ木葉形面取尖頭器の開発が取香和田戸遺跡、上貝塚貝塚、五本松 No.3 遺跡で示される。南河原坂第 3 遺跡では木葉形面取尖頭器と砂川型尖頭器の共存が検討された。この事例は、下総台地を遊動領域とした狩猟民が、木葉形面取投槍を砂川期に開発した可能性を示唆する。そして、下総台地を遊動領域とした狩猟民が、在地石材で砂川期に開発した有肩形面取投槍が東内野型尖頭器と考えられる。東内野型尖頭器と砂川型尖頭器の技術共有は、有肩形、基部裏面調整、挟入状調整に見出すことができる<sup>4)</sup> (図 10)<sup>5)</sup>。

### 5. 削片系両面調整技術の開発起源

南関東地域で砂川期形成前後に出現した様々な形態の開発要因を説明するには、狩猟民の単独技術開発より、複数の狩猟民による技術知の複合 (田村 2011a) と考えた方が現実的である<sup>6)</sup>。群馬県上白井西伊熊遺跡では、国府型ナイフ形石器と面取両面調整石器の共存が検討でき (須藤 2011)、樽口遺跡では有肩形・面取両面調整石器と国府型ナイフ形石器の共存が検討できる。

最終氷期最寒冷期という安定期 (工藤 2012) が過ぎ、動植物が生息領域を改変せざるを得ない環境変動期に、環日本海地域の広域にわたって狩猟民の遊動領域再編が行われ、新たな資源開発地で遭遇した技術を異とする狩猟民間で、技術情報の交換・共有が行われた可能性が高い。その現象として国府型ナイフ石器と削片系両面調整石器の共存が評価できる。しかし、安斎 (2004) や田村 (2008) が想定したように、国府型ナイフ石器の影響下において両面調整尖頭器が開発された訳ではない。開発初期の両面調整尖頭器は削片剥離を特徴とする両面調整石器である。国府型ナイフ石器の技術情報には削片剥離技術は存在しない。それでは、両面調整石器における削片剥離技術の開発起源地はどこに求められるのであろうか。

田村 (2008, 2011a) が、平賀一ノ台遺跡の東北産頁



↑ 投槍化    ↔ 技術の共有と組み替え

図 10 削片系両面調整石器の形態変化<sup>5)</sup>

岩製「有肩尖頭器」から導いた評価は「磐越高地とゆかりの深い地域集団の下総台地への移動」であり、削片系両面調整石器技術の開発地は東北地域にある可能性が高い。東北産頁岩では大平山元 II・III 遺跡－赤柴遺跡－細原遺跡－上林遺跡－角田台遺跡の石器群、信州産黒曜石ではすぐね遺跡－ヘイゴゴロ遺跡－男女倉遺跡群－富田下大日遺跡の石器群が検討対象となる。

それらの編年的位置を明確に把握することは困難であるが、赤柴遺跡・富田下大日遺跡の放射性炭素年代（山元 2012; 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008）、東北産頁岩を用いた大型両面調整石器による削片剥離技術と類荒屋型彫器を含む多様な彫器形態から、20,000 <sup>14</sup>C yr BP（北海道埋蔵文化財センター 1999）前にある古北海道半島の蘭越・美利河型細石刃技術（須藤 2011）に開発起源を求めることが現在では最も妥当であろう。

その難題は石刃技術を含めて今後の課題<sup>7)</sup>とし、有楯尖頭器とされた両面調整石器は、尖頭器に止まることなく、削片系細石刃核と同様に、削片剥離を特徴とした両面調整石器であることを強調して本論を終結する。

謝 辞

岩宿博物館第 56 回企画展で、本論で基礎資料とした石器群の多くを観察させて頂いた。岩宿博物館館長小菅将夫氏と所蔵機関に厚く御礼申し上げます。岩宿フォーラム実行委員会の芹澤清八氏、西井幸雄氏、麻生敏隆氏、軽部達也氏、阿久澤智和氏には、文献収集でご協力頂いた。記して感謝申し上げます。英文要旨は山田しょう氏にお願いした。不変の友情に厚く感謝します。

註

1) ただし、大型扁平両面調整石器である神子柴型尖頭器（須藤 2008）の側縁利用ほどには組織的な利用はなかった

であろう。厚さを調整して鋭利な側縁形成を可能とした両面調整技術には至っていないからである。縁辺整形のために面取剥離が必要であったのである。大型両面調整石器は種子柴型尖頭器がイメージされ、新しいと理解されがちであるが、それならば面取剥離の必要性はない。

大型扁平両面調整尖頭器の開発はL1H層の尖基柳葉形尖頭器開発段階(須藤2006)であり、削片剥離を必要とした大型両面調整技術の段階的位置はそれ以前である。

- 2) 切出形石器の形態的多様性と有肩形両面調整石器の関係性に関しては、別稿で再論したい。
- 3) 削片系両面調整石器狩猟民と切出形石器狩猟民の技術共有は、堂ヶ谷戸遺跡、武蔵国分寺関連遺跡・武蔵台遺跡の面取彫器、丸山東遺跡の両面調整彫器の存在でも示唆されている。今井三騎堂遺跡の有肩形面取尖頭器も削片系両面調整石器狩猟民と切出形石器狩猟民の技術共有と理解できようか。

渋川・平賀型両面調整石器の開発主体者を限定することは困難であるが、東北産頁岩利用から平賀一ノ台遺跡を典型とする平賀型は東北地域の削片系両面調整石器狩猟民、両面調整形態を含む高座渋谷団地・下九沢山谷遺跡から渋川遺跡を典型とする渋川型は南関東地域の切出形石器狩猟民と考えておきたい。重要なのは狩猟民相互の技術複合である。

- 4) 中部日本海地域では、削片系両面調整技術に構造化されていた石刃技術を組み替えて、投槍形態である杉久保型尖頭器と面取彫器である神山型彫器が開発された(須藤2005)。杉久保・砂川型尖頭器の柳葉形形態は面取尖頭器の形状を組み替えたものと考えていた(須藤2005)が、初期面取両面調整石器では尖頭器形態が不明瞭であった。検討対象としては骨角製尖頭器の形状が考えられる。特に長さのある狭長柳葉形の杉久保型尖頭器はその可能性が高い。

佐藤(2011)は蘭越型細石刃技術を開発起源とする荒川台型細石刃技術の開発年代を、荒川台遺跡の杉久保型尖頭器との共存から蘭越型細石刃技術と同等な年代と把握している。とすれば、杉久保型尖頭器開発者が狭長な骨角製植刃槍の形状を熟知していたこととなる。

- 5) 砂川型尖頭器の図は横山5丁目遺跡、切出形石器の図は上から比丘尼橋遺跡、堂ヶ谷戸遺跡、渋川遺跡である。それ以外の図は本文参照。
- 6) 男女倉遺跡群には多様なナイフ形石器が残されており、削片系両面調整石器狩猟民と切出形石器・砂川型尖頭器狩猟民が資源と技術を共有した場所と考えられる。相模野台地の深見諏訪山遺跡・吉岡遺跡群は削片系両面調整石器狩猟民の領域参入を示唆し、削片系両面調整石器狩猟民においても技術共有における技術改良が行われていた可能性は高い。

下触牛伏遺跡では、砂川型尖頭器の共存が検討されている。在地石材の利用も多く、赤城山麓を主要な遊動領域とした技術適応として、両面調整石器から剥片素材の

彫器を主体とする装備へ改良が行われていた可能性も指摘できる。

南関東地域で砂川型尖頭器との共存が検討される木葉形面取尖頭器には、抉入状整形で鋭い先端部が形成された尖頭器が存在する。その整形技術は砂川型尖頭器との技術共有を示唆する(図10)。単品の出土事例がほとんどであり、製作遺跡の実態が不明であるが、両面調整石器主体から剥片石器主体へ推移する段階に、貴重な両面調整石器として長期的に管理された形態と理解されようか。

面取尖頭器は、信州産黒曜石を資源とした剥片素材の小型半両面・片面調整尖頭器(鷹山S型尖頭器、須藤2006)に改良されていく。面取剥離を必要としない大型両面調整尖頭器の開発は、多様な在地石材でも大型扁平な両面調整石器の製作を可能とする両面調整技術の蓄積を必要とした。

- 7) 本論は削片系両面調整技術の提示であり、各地域の詳細な技術変動は別稿で論じたい。

#### 引用文献

- 阿久澤智和 2004「赤堀町千鳥遺跡出土の槍先形尖頭器について」『群馬考古手帳』14:39-42
- 安斎正人 2004「東北日本における「国府系石器群」の展開—槍先形尖頭器石器群出現の前提—」『考古学』II:1-40
- 青森県立郷土館 1980『大平山元II遺跡』,114p.,青森
- 青森県立郷土館 1981『大平山元III遺跡』,58p.,青森
- 盤古堂考古学研究所 1999『大和市No.210遺跡』,64p.,神奈川
- 比丘尼橋遺跡調査団 1993『比丘尼橋遺跡B地点』,267p.,東京
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『下触牛伏遺跡』,278p.,群馬
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『神保富士塚遺跡』,604p.,群馬
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『天引狐崎遺跡I』,142p.,群馬
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『今井三騎堂遺跡—旧石器時代編—』,510p.,群馬
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『上武道路・旧石器時代遺跡群(1)富田下大日遺跡』,475p.,群馬
- 平賀遺跡群発掘調査会 1985『平賀』,818p.,千葉
- 北海道埋蔵文化財センター 1999『柏台1遺跡』,311p.,札幌
- 飯田茂雄 2006「槍先形尖頭器の出現と渋川遺跡の左右非対称形槍先形尖頭器」『駿台史学』128:21-43
- 飯田茂雄・井上智英 2006「第123号探掘址3c層上部ブロック出土の左右非対称形槍先形尖頭器」『黒曜石文化研究』4:3-22
- 印旛郡市文化財センター 1994『木戸先遺跡』,456p.,千葉
- 伊藤 健 1989「槌状剥離を有する尖頭器の技術と形態」『東

- 京考古』7:1-27
- 岩宿フォーラム実行委員会 2004『武井遺跡の槍先形尖頭器』, 86p., 群馬,
- 岩手県文化振興事業団 2013『下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡発掘調査報告書』, 841p., 岩手
- 角張淳一・横山祐平 1993「男女倉遺跡と大平山元遺跡の編年的位置について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』pp.397-440, 山形, 加藤稔先生還暦記念会
- かながわ考古学財団 1998『吉岡遺跡群Ⅵ』, 346p., 横浜
- 蟹田町教育委員会 1992『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』, 145p., 青森
- 上敷領久・国武貞克 2001「恋ヶ窪東遺跡」『第7回石器文化研究交流会発表要旨』, pp.21-24, 静岡, 石器文化研究会
- 川田 均 1991「複合する機能とその形態—栃木県出土の槌状剥離を有する尖頭器を廻る考察—」『栃木県考古学会誌』13:23-46
- 川口 潤 1988「槌状剥離を有する尖頭器の再検討—製作工程の復元を中心として—」『旧石器考古学』86:29-54
- 川上 元・神村 透・森山公一 1976「長野県小県郡和田村唐沢ヘイゴロゴロの旧石器文化資料」『長野県考古学会誌』26:1-28
- 県営高座渋谷団地内遺跡発掘調査団 1995『県営高座渋谷団地内遺跡』, 191p., 神奈川
- 北茨城市史編さん委員会 1982『細原遺跡』, 118p., 茨城
- 北長山野遺跡調査会 1990『東・北長山野遺跡』, 507p., 千葉
- 吉祥寺南町遺跡調査団 1996『吉祥寺南町三丁目遺跡B地点』, 92p., 東京
- 工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史:高精度放射性炭素年代測定と考古学』, 373p., 東京, 新泉社
- 国武貞克 2000「下柳沢遺跡第3文化層をめぐる問題—槌状剥離を有する尖頭器の製作をめぐる行動論的一考察—」『下柳沢遺跡』, pp.615-628, 東京, 早稲田大学文化財整理室
- 国武貞克 2003「両面体調整石器群の由来—関東地方Ⅴ・Ⅳ層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性—」『考古学』I:52-77
- 松戸市遺跡調査会 2000『境外Ⅱ遺跡発掘調査報告書』, 88p., 千葉
- 明治大学校地内遺跡調査団 2011「下原・富士見町遺跡発掘調査概報」『明治大学校地内遺跡調査団年報』6:11-64
- 三鷹市遺跡調査会 1985『坂上遺跡』, 72p., 東京
- 道澤 明 2000「三崎3丁目遺跡」『千葉県の歴史資料編考古1(旧石器・縄文時代)』, pp.86-91, 千葉, 千葉県史料研究財団
- 三宅 徹也 1980「大平山元技法AとB」『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』, pp.43-48, 青森, 青森県立郷土館
- 森嶋 稔 1975「旧石器文化の中から—特に男女倉技法をめぐって—」『男女倉』, pp.169-173, 長野, 和田村教育委員会
- 守矢昌文・斎藤幸恵 1986「先土器時代の茅野」『茅野市史第一編原始』, pp.22-127, 長野, 茅野市史編纂委員会
- 村松 篤 1997「籠原裏遺跡」『埼玉考古』別冊5:153
- 中島 誠・軽部達也 1993「三ツ木東原遺跡」『藤岡市史資料編原始・古代・中世』, pp.18-19, 群馬, 藤岡市
- 中村遺跡発掘調査団 1987『中村遺跡』, 597p., 神奈川
- 中村喜代重 1979「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古』7:89-116
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a『貫ノ木遺跡 西岡遺跡』, 304p., 長野
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b『裏ノ山遺跡 東裏遺跡 大久保南遺跡 上ノ原遺跡』, 160p., 長野
- 長野県埋蔵文化財センター 2004『仲町遺跡』, 576p., 長野
- 練馬区遺跡調査会 1987『葛原遺跡B地点調査報告書』, 233p., 東京
- 新潟県朝日村教育委員会 1996『樽口遺跡』, 188p., 新潟
- 沼津市教育委員会 1987『広合遺跡発掘調査報告書』, 278p., 静岡
- 相模原市立屋内水泳場建設事業地内遺跡調査団 1997『横山5丁目遺跡』, 120p., 神奈川
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『中砂遺跡』, 201p., 埼玉
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996『丸山・青梅道南・十文字原・東武蔵野・西武蔵野』, 181p., 埼玉
- 佐野市教育委員会 2004『上林遺跡』, 948p., 栃木
- 佐藤宏之 2011「荒川台型細石刃石器群の形成と展開」『考古学研究』58(3):51-68
- 佐藤雅一 2002「新潟県津南段丘における石器群研究の現状と展望—後期旧石器時代から縄文時代草創期に残された活動痕跡—」『先史考古学論集』11:1-52
- 世田谷区教育委員会 2000『堂ヶ谷戸遺跡 第33次発掘調査概報』, 57p., 東京
- 篠原 正 1977「東内野型尖頭器について」『東内野遺跡』, pp.25-26, 千葉, 東内野遺跡発掘調査団
- 篠原 正 1980「東内野型尖頭器と槌状剥離に関する一考察」『大野政治先生古稀記念房総史論集』, pp.1-54, 千葉, 大野政治先生古稀記念論集刊行会
- 信州ローム研究会 1972『男女倉』, 20p., 長野
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009『桜畑上遺跡』, 306p., 静岡
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『桜畑上遺跡Ⅰ』, 234p., 静岡
- 菅沼 亘 1996「[神山型彫刻刀]の再検討—中部地方北部の彫刻刀形石器の分析を中心に—」『考古学と遺跡の保護』, pp.7-25, 新潟, 甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 須藤隆司 1989「中部槍先形尖頭器文化の成立」『長野県考古学会誌』59・60:111-134
- 須藤隆司 2005「杉久保型・砂川型ナイフ形石器と男女倉型有槌尖頭器—基部・側縁加工尖頭器と両面加工尖頭器の技術構造論的考察—」『考古学』III:73-100
- 須藤隆司 2006「両面調整技術構造による石槍の変動—両面



- 調整石槍の出現と地域開発における歴史変動—『石器文化研究』13：31-54
- 須藤隆司 2008「神子柴型尖頭器の形態的枠組み—大型扁平両面調整石器の歴史的見方—」『神子柴』林茂樹・上伊那考古学会編, pp.248-267, 長野, 信毎書籍出版センター
- 須藤隆司 2009「細石刃技術—環日本海技術と地域技術の構造と組織—」『旧石器研究』5：67-97
- 須藤隆司 2011「国府型ナイフ形石器と有樋尖頭器の関係—狩猟具形態と遊動領域—」『岩宿フォーラム 2011 / シンポジウム上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法予稿集』, pp.80-85, 群馬, 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 諏訪問 順・堤 隆 1985「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡 第IV文化層の石器群について」『旧石器考古学』30：85-108
- 鈴木次郎 1997「南関東におけるナイフ形石器文化の彫器(3)—いわゆる「細原型彫器」について—」『神奈川考古』33：1-32
- 鈴木道之助 1975「木苺峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 III』房総考古資料刊行会, pp.45-124, 千葉
- 田村 隆 2000「木苺峠再訪—房総半島小型石槍の変遷—」『千葉県史研究』8：28-57
- 田村 隆 2008「黒曜石のハウ」『考古学』VI：1-44
- 田村 隆 2011a『旧石器社会と日本民俗の基層』, 263p., 東京, 同成社
- 田村 隆 2011b「旧石器時代から縄文時代の狩りの道具」『貝塚』67：1-31
- 舘野 孝 1982「細原遺跡の石器群に関する一考察」『細原遺跡』北茨城市史編さん委員会, pp.85-102, 茨城
- 千葉県文化財センター 1982『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 VII』, 257p., 千葉
- 千葉県文化財センター 1989『佐倉市南志津地区埋蔵文化財調査報告書 I 御塚山・大林・大堀・西野・芋窪遺跡』, 580p., 千葉
- 千葉県文化財センター 1984『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書 IV No.7 遺跡』, 242p., 千葉
- 千葉県文化財センター 1994『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書 VIII 取香和田戸遺跡(空港 No.60 遺跡)』, 252p., 千葉
- 千葉県文化財センター 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書 流山市上貝塚貝塚』, 499p., 千葉
- 千葉県文化財センター 1998『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 XII 白井町一本桜南遺跡』, 324p., 千葉
- 千葉県文化財センター 2003『新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書 I 鎌ヶ谷市五本松 No.3 遺跡』, 198p., 千葉
- 千葉県文化財センター 2005『千原台ニュータウン XIII 市原市草刈遺跡(西部地区旧石器時代)』, 298p., 千葉
- 千葉県教育振興財団文化財センター 2012『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 角田台遺跡(旧石器・縄文時代編)』, 429p., 千葉
- 千葉県史料研究財団 2003『富里市東内野遺跡旧石器時代石器資料調査報告』, 232p., 千葉
- 千葉市文化財調査協会 1996『土気南遺跡群 V 南河原坂第3遺跡』, 287p., 千葉
- 堤 隆 1988「樋状剥離を有する石器の再認識(上)—男女倉型・東内野型等と呼称されるある種の石器をめぐって—」『信濃』40(4)：24-45
- 堤 隆 1989「樋状剥離を有する石器の再認識(下)—男女倉型・東内野型等と呼称されるある種の石器をめぐって—」『信濃』41(5)：38-64
- 尖石考古博物館 1962『澁川』, 100p., 長野
- 東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会 1995『丸山東遺跡』, 202p., 東京
- 東京国立近代美術館遺跡調査委員会 1991『竹橋門』, 523p., 東京
- 東京都埋蔵文化財センター 1996『府中市 No.29 遺跡』, 128p., 東京
- 東京都埋蔵文化財センター 2003『武蔵国分寺跡遺跡北方地区』, 684p., 東京
- 東京都埋蔵文化財センター 2010『武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺跡』, 671p., 東京
- 栃木県文化振興事業団 1996『西赤堀遺跡』, 263p., 栃木
- 土浦市教育委員会 1998『前谷遺跡群』, 134p., 茨城
- 調布市教育委員会 1982『しろやま』, 48p., 東京
- 宇田川浩一 2000「東内野遺跡」『千葉県の歴史資料編考古1(旧石器・縄文時代)』, pp.124-129, 千葉, 千葉県史料研究財団
- 上野修一 1987「宮之前遺跡」『那須の遺跡—渡辺龍瑞先生寄贈資料目録第1集—』, pp.30-34, 栃木, 栃木県立博物館
- 和田村教育委員会 1975『男女倉』, 179p., 長野
- 和田村教育委員会 1993『長野県黒曜石原産地遺跡分布調査報告書(和田峠・男女倉谷) III』, 241p., 長野
- 和光市遺跡調査会 1994『城山南遺跡』, 38p., 埼玉
- 山元 出 2012「赤柴遺跡(1次調査)」『第26回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』, pp.89-92, 仙台
- 大和市教育委員会 1984『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告書 II』, 402p., 神奈川
- 大和市 No.199 遺跡発掘調査団 2008『上草柳遺跡群大和配水池内遺跡 I』, 346p., 神奈川

(2014年1月9日受付 / 2014年1月30日受理)

# Spall removal type biface: a reconstruction of the Omegura-Higashiuchino fluted points

Takashi Suto<sup>1\*</sup>

## Abstract

The purpose of this paper is to discuss spall-removing techniques in bifaces by means of reconstructing two types of fluted points, the Omegura and the Higashiuchino, the pointed burin, and the Omegura technique.

*Spall removal type biface* include diverse morphological variations such as bifaces, faceted tools, faceted burins, fluted bifaces, burins, faceted points, shouldered bifaces, shouldered faceted tools, backed shouldered points, and shouldered faceted points.

*Spall removal type biface technique* refers to a technique that features spall removal including facet removal and fluting. This technique allowed the rejuvenation of bifaces as well as the utilization of the spalls removed, enabling a more efficient long-term lithic resource management, and thus, wide range foraging.

The Last Glacial Maximum triggered a climatic change that altered the faunal and floral habitat, leading to the reorganization of the existing foraging territories of hunter-gatherers of the Palaeo-Honshu Island. The hunter-gatherers who encountered each other in these new resources would have shared information about their techniques, allowing therefore the development of diverse stone tool types that were better adapted to suit the resources in the new foraging territories.

On the Palaeo-Sakhalin-Hokkaido-Kurile Peninsula (Palaeo-SHK), the biface spall removal technique was developed for the production of microblades. In the northeastern part of the Palaeo-Honshu Island, the Odaiyamamoto-Omegaura biface, as well as the Sugikubo point, were developed by adapting the spall removal technique from Palaeo-SHK. In the southern Kanto region, the Shibukawa-Hiraga biface and the Sunagawa-Higashiuchino point were developed by adjusting the technique from the north-eastern region.

The spall removal type biface technique responsible for the development of diverse tools suitable for the exploitation of diverse resources represents a techno-informational complex of several hunter-gatherer groups.

**Keywords:** spall removal type biface technique; shared technology; faceted point; faceted burin; shouldered faceted point

(Received 9 January 2014 / Accepted 30 January 2014)

---

<sup>1</sup> Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 3670-8 Daimon, Nagawa-machi, Nagano 386-0601, Japan  
\* Corresponding author: T. Suto (sutou@mwb.biglobe.ne.jp)